

あとがきにかえて

もう一杯 飲みたくなった あのころ思い浮かべてみて
今日のあさ 零時出発 新たな日
流れていく 砂時計 逆に立たせてみる

千種眞一教授は2016年3月末をもって東北大学大学院文学研究科を定年によりご退職されることとなった。流れてゆく時間の早さを実感する次第である。

先生は1987年に助教授として東北大学文学部に着任され、今日まで東北大学文学部・文学研究科言語学専攻分野における言語学の研究と教育にご尽力されて来られた。特に先生のインド・ヨーロッパ語学研究に対する貢献は大きく、2014年からは日本歴史言語学会会長としてもご活躍されている。

私の本棚を飾っている『ゴート語辞典』『古典アルメニア語辞典』を見ていると先生の学者たる面目がよく分かる。誰も行かない道を黙々と歩いていく修道僧の風貌さえも感じられる。私も大学の講師になって20年近くになるが研究に対する情熱や言語学に貢献したい気持ちが初心の頃には及ばない時がある。その際、先生がお書きになった辞典を開くと、辞典の完成のために先生が10年以上にわたって注いだ苦悩や熱情が伝わってくる。その姿はまさに学者そのものであり、ご尊敬の気持ちで頭が下がる次第である。

先生と日本酒。頭に浮かべるだけで口もとに微笑が浮かんでくる。ご存じのとおり千種先生は大のお酒好きでいらっしゃる。特に、学生達とは毎年行われる新年会、お花見、研修旅行、芋煮会などの際にお酒を交わしながらさまざまな話題で楽しい時間を過ごしていらっしゃったと思う。私は今でもあのころが懐かしい。

先生と私達が交わした酒は、師匠と弟子が交わす敬愛酒でもあり、ご恩を受けた人に対する報恩酒でもあり、友人にそそぐ友情酒でもあり、同僚と高くあげる乾杯酒でもあり、亡くなった方に捧げる哀悼酒でもあり、愛する人々が交わす相勸酒でもあった。瓢箪が摩れて摩れて酒泉が濁くまで、今夜空の星が落ちて黎明が来るまで先生と飲みたい気持ちである。

千種先生には今後とも健康に留意されて、いつまでも幸せで愉快的な日々をお送りなさるようお祈りする次第である。

(曹 永湖)